

一般演題4-6

腸管気腫症を発症した生後1月の乳児に高気圧酸素療法を施行した一例

堀内辰男 高澤知規 齋藤 繁

群馬大学医学部附属病院 麻酔科蘇生科

今回生後1月の乳児が発症した腸管気腫症に対して、高気圧酸素療法(HBO)を施行し、症状が改善した一例を経験したので報告する。

症例は生後1月女児。前院では胎児徐脈のため緊急帝王切開にて40週5日で出生、出生後は特に問題なく経過し退院。退院後日齢27日目に哺乳後嘔吐し、その後血便を認めたため前院に入院した。入院後血便増加したため精査加療目的に当院搬送、入院となった。

入院後現症では、身長48cm、体重3550g、体温37.7度、心拍数198回/分、自発呼吸下でSpO₂100%、血圧75/41mmHgであった。明らかな外表奇形なく、大泉門は平坦、軟、眼瞼結膜に黄疸、貧血を認めなかった。検査所見では貧血が認められた。画像所見では内腔に鋸歯状変化を認め、注腸造影では腹部CTで上行結腸に腸管壁が二重構造に認められた。画像所見より腸重積は否定でき、腸管気腫症と診断した。

入院後絶食、補液管理とし、抗生剤投与を行った。第2病日、耳鼻科医師により鼓膜切開を施行した後、主治医、母親が付き添いの上、2気圧60分の設定でHBOを施行した。血便は同日以降消失した。

以降計6回、連日HBO施行した。第8病日に撮影した腹部CTで腸管気腫が消失したため同日以降はHBOを施行しなかった。また同日より経口摂取を開始した。症状改善したため、第30病日に退院した。現在も小児科外来にて経過観察中である。

小児期における腸管気腫症は、生後一月以内に発症する壊死性腸炎に伴い発症することが多いとされている。新生児期において、壊死性腸炎にfree airを伴う腸管気腫症は外科治療の適応となる。新生児期以降では症状によってはfree airを認めても保存的治療も可能ではないかという報告もある。¹⁾

成人では腸管気腫症に対しての治療方針は明らかで

はないが、気腫ガスは窒素であることが多いためHBOが有効であるという報告がある。また腹膜刺激症状の有無で外科治療の判断をするという報告がある。²⁾

今回の症例では明らかな腹膜刺激症状が認められず、画像所見でfree airも認められなかったため、HBO治療を先行させた。

また乳児に対してHBOを施行したが、乳児、未熟児においては酸素投与に伴う未熟児網膜症が認められており、特に在胎32週以前では罹患しやすいと報告されている。今回の症例では眼科診察で網膜に異常は見られなかったが、新生児、特に在胎週数が短い患児においては酸素投与及びHBO施行時には眼科受診が重要と考えられる。³⁾

当院において新生児及び乳児にHBOを施行した症例は少なく、今回の施行に当たっては小児科、麻酔科、耳鼻科、眼科そして保護者との連携が重要であった。

【参考文献】

- 1) 森沢猛 et al. 空腸瘻管理中にPneumatosis intestinalisを発症した1乳児例 日本周産期新生児医学会雑誌 2004;40:855-8
- 2) Togawa S, et al: Evaluation of HBO2 therapy in pneumatosis cytoides intestinalis. Undersea Hyperb Med. 2004;31:387-393
- 3) 江東孝夫 et al. 小児における高気圧酸素治療の経験 JJACHOD 2004;1:34-40